

竹中平蔵著「竹中式 マトリクス勉強法」幻冬舎 2008年10月10日刊を読む

## 1. 飽きるほど暗記と基礎を繰り返せ

### (1) 数学だって暗記科目だ

まず最初に強調しておきたいのが、「お勉強」すなわち資格試験などの受験勉強は、とどのつまり、記憶力を試す戦いだということです。

暗記科目といわれる歴史や地理など社会科はもとより、「ロジックの学問」といわれる数学でさえも、いくつかの公式を頭に叩きこめば、あとは応用でなんとかなってしまいます。受験勉強レベルなら、記憶力の枠を超えるものではありません。

ですから、記憶力に自信のある人にとって、受験勉強はいたって楽な戦いです。その反面、記憶力がさほどでもない人にとっては、苦痛以外のなにものでもありません。

しかし、人間の能力はなにも記憶力に限ったものではありません。私は、クリエイティビティと記憶力が比例するといった類<sup>たぐい</sup>の話は聞いたことがありません。ですから、別に記憶力に自信がないからといって、妙に自分を卑下<sup>ひげ</sup>する必要もないのです。

### (2) 参考書ではなく問題集を暗記せよ

繰り返しになりますが、「お勉強」こそ基礎がすべてです。受験勉強は、結局記憶力の積み重ねの集大成ですから、基礎を繰り返し覚えるしかありません。

ところが、人間の記憶はそうたやすくは定着しないもの。誰より早くに勉強を始め、端から覚えていったとしても、残念なことに、これまた端から忘れていくのが人間です。

たとえ暗記していたとしても、入試本番では、緊張を強いられるため、設問の切り口によっては、暗記した物事がうまく引き出されないこともあります。

では、どうしたらいいのか？一度かたづけた同じ問題集を、何度も解くのです。いや、解くというよりは、即答できるくらいまで、ひいては「もうこの問題は見るのもアホらしい」とウンザリするくらいまで、同じ問題集をしつこく繰り返すのです。

一般的に、丸暗記といえば、教科書や参考書を暗記するのが王道と思われがちですが、これらは「設問」という形になっていないため、覚えた気になっていても、実は覚えていないことがあります。その点、問題集を暗記すれば、「こう聞かれれば、こう答える」と、一種の反射神経で答えられるようになります。

まったくバカらしい話と思うかもしれませんが、あらゆる受験勉強は、先に申しあげた通りしょせんは記憶力の勝負です。それを試されるのですから、バカらしいばかりとはいってられません。

## 2. 人より早く始めた者が必ず勝つ

### (1) スタートダッシュで差をつける

中学時代に、高校の勉強を終わらせる。

先にも書きましたが、あらゆる受験勉強は覚える内容が膨大です。どんな天才も、ひと月やそこらで記憶できるシロモノではありません。覚えられたとしても、すぐに忘れてしまうのがオチでしょう。

この手の勉強は、時間をかけて、何度も何度も繰り返しやるしかありません。となると、誰よりも早く、一日でも早く始めることが勝負を分ける——つまり、スタートダッシュに勝る必勝の戦略はないのです。

これをいうと嫌味かもしれませんが、私の場合、学生時代から勉強は常に先回り先回りを心掛け、英語や数学については中学校3年生で高校3年分の勉強は既に終わらせていました。

こと英語に関していえば、中学卒業から高校入学までの春休みの間に、参考書2冊分を丸暗記したため、高校時代、分からない単語に困ったという経験はほとんどありませんでした。

従って、高校時代の勉強の基本は「繰り返す」だけなのですから、非常に楽でした。「早く、やらなくちゃ」だとか「あれもこれも覚えないと」といったプレッシャーにさいなまれることも皆無でした。

ストレスという面からいっても、お勉強は早く始めるのに限ります。

### (2) 1週間はなぜ日曜日から始まるのか？

アメリカの秀才たちも、ライバルより少しでも早くと心がけているようです。

1 週間はなぜ日曜日から始まるのか？私は、ハーバード大学に留学したとき、その意味を肌感覚で体験しました。

ハーバードの学生は、高い授業料のモトを取るべく、みなそれぞれ 24 時間必死で勉強しますが、金曜日の授業が終わったときは、1 週間が終わった解放感で、みなパーティー気分になります。

しかし、浮かれているのはせいぜい土曜まで。日曜日になると、さっそく翌 1 週間の予習が始まります。

その様子ときたら、みな目の色が変わるほど。日曜の夕方ともなると、図書館の駐車場は満杯で、あきを探すのに苦労するほどでした。

勉強する人にとって、日曜日はまさに 1 週間の始まりなのです。

P98 ~ 103

### 3 . 暗唱で英語を頭の中に詰め込む

#### (1) 頭に「英語」が入っていなければ、逆立ちしたって喋れない

大学時代、ある英語学校に通っていたときの事です。当時の英語の先生は、授業を始める前、まずコーラの空き缶を持ってきて、私たちにこう言いました。

「この缶は、逆さに振っても何も出てきません。なぜなら、中身がからっぽだから。皆さんが英語を喋れないのもまた同じ。頭の中に、英語が何も詰まってないからだ」

確かに、先生の言う通りです。先述しましたが、英語はまず単語を覚えなことには、一言も話せません。もともと頭の中に存在しない単語は、ウーンと唸<sup>うな</sup>って考えようが、逆立ちしようが、出てこないのは当然です。

なおも、先生はこう言いました。

「英語が喋りたかったら、頭の中に英語を詰めるしかない。そのためには、とにかく暗唱することです」と。

さて、そんな理由から、第一のコツは「暗唱すること」です。

#### (2) ケネディやキング牧師のスピーチを暗唱

その先生は、暗唱の応用形として、有名なスピーチを暗唱することを薦<sup>すす</sup>めてくれました。さっ

そく私は、有名なキング牧師の「I have a dream」や、ケネディの大統領就任演説などを必死になって覚えました。

ところが、このスピーチが意外や意外に長いのです。ケネディのスピーチは 20 ~ 30 分。キング牧師のスピーチは、もっとあります。

当然のことながら、出てくる単語の量も半端な数ではありません。

しかし、人間やる気になればできるもの。繰り返し繰り返し、ブツブツ言っているうちに完全に暗唱できるようになりました。

そして、先生が仰る通り、これにより、頭の中に英語が詰まっていく実感を得たのです。何より、これだけの長さの英文がそらんじられるようになると、自分に自信がつくようにもなります。そんな意味から、英文の暗唱は、英語の初期トレーニングとして非常に効果的だと思います。とりわけ政治家のスピーチは、特に完成度の高い英文です。暗唱する材料にはピッタリといえるでしょう。

ところで、映画や海外ドラマを英語版で観て英語を勉強することが流行っていますが、過去に試した結果、私に限って言えば、ほとんど効果はありませんでした。洋楽の CD を聴くのもまた然りです。

しかし、もし外国に住む機会があるならば、是非お薦めしたいのが、耳の不自由な人用に開発された、あらゆる番組に字幕が付けられるセットトップ・ボックス(STB)。私は、アメリカ在住中、ある韓国人に薦められてこれを導入しましたが、ニュースからアニメに至るまで、何から何まで英語の字幕が付くため何を言っているのかがよく理解でき、英語を聞く能力が随分上がりました。

いずれにしても、学習方法には人によって向き不向きがあるので、よさそうだったものは片っ端から試してみるといい。取捨選択するのはそれからです。

### (3) 音読で英語脳を鍛える

これは、暗唱にも通じることですが、語学は声に出して音読すると、確実に上達します。記憶は五感を駆使すると前頭葉が活性化されるため定着しやすく、またいざ記憶を引き出すときも出力しやすいといわれています。音読は、この視覚と聴覚を刺激します。

もっとも、日本人は英語に恐怖心があるため、英語を音読するのをやたらと恥ずかしがる傾向があります。だったら、中学校時代の教科書でもいい。簡単な英文なら言葉に詰まることはそうありませんから、できる範囲の教材を、とにかく音読してみましょう。

すると単語や文法が、するすると頭に入ってくる実感が得られるはずです。

ちなみに私は、今でも音読は欠かしません。特に、国際会議に出席する前などは、行きの飛行機の中で、ひたすら英字新聞や原稿をブツブツ音読しています(飛行機は騒音がうるさいため、案外目立ちません)。

少々恥ずかしいようですが、音読を続けることで、頭の中身が「英語モード」に切り替わる実感が得られますから、みっともないなんてことは言っていないでください。

#### 4. 分からない単語は必ず辞書を引け

##### (1) ボキャブラリーを増やした者の勝ち

当たり前のことですが、すべての語学は語彙ごいが増えないことには、同じ言葉をただ繰り返すだけで、なかなか上達しません。語学力 = 単語力と云うといいほど、多くの単語を暗記することは非常に重要です。

そして単語力を上げるには、辞書を引く習慣をつけることがやはり効果的。なかんずく、学生時代に私が実践した、以下のやり方は絶大な効果がありました。

そのやり方とは、毎日英字新聞の中から、興味をそそられる一つの記事を選び、分からない単語に出会ったら、必ず辞書を引くこと。そして、辞書で調べた単語は、「My 単語帳」に書き込み、しらみつぶしに暗記していくのです。この過程を繰り返すと、いつしか飛躍的にボキャブラリーが増えていきます。

また、ハーバード時代はこんな工夫もしました。それは朝あった出来事を、英語でブツブツ言うこと。

「今日は、6時半に目覚まし時計で目覚めて、台所に来てコーヒーを淹いれてトーストを焼いたが、焦がしてしまった。ちなみに、朝のニュース番組では、キャスターがこんなことを言っていたが、私はこう思った」

などという、あなたの身の回りの日常を片っぱしから英訳するのです。

トライしてみると、必ず言葉に詰まることがあります。そうしたら、すぐにまた辞書で調べるのです。たとえば、「トーストを焦がす」という部分に詰まったら、辞書を引く。そうすれば、英語で「焦がす」とは「scorch」と言うのだと自然に学ぶことができます。

ただしここで重要なのは、英字新聞などを読む場合、ある記事は辞書を引いて調べるが、その他は辞書を引かないでとにかく読むこと。単語は重要ですが、一方で一つの単語がわからなくても、前後の状況から大意をつかむことも重要なのです。どこまで行ってもすべての単語が分かるということはありません。この使い分けは「夢見ながら耕す」という点と、似たところがあります。

P129 ~ 134

#### [コメント]

竹中平蔵先生とは、大臣時代にダボス会議の東アジア版である World Economic Forum on East Asia で毎年のようにお会いし、また、英語の議論をお聞きした。日本の国益を代表してとめどもなく流れ出るような英語での御発言の背景には、このような勉強があったのかをよく示してくれる本書には説得力がある。「学び方を学ぶ」ことは大切な能力の一つ。是非、本書で竹中方式を身につけて頂きたい。

- 2009年11月23日 林明夫記 -